学習システム促進研究センター
『学習システム研究』第 2 号　2015(pp.49-57)

日本語教育分野における近・現代日本文学のあり方

―西原大輔「世界の中の近・現代日本文学」をもとに―

柳本 大地・費 暁東

日本語教育分野において，日本文学はどのように取り入れられるべきか。また，教師はどのように日本文学を教授すべきだろうか。これらの問題に対して，本研究では，西原大輔氏が執筆した「世界の中の近・現代日本文学」の論文の構成と構造を分析し，関連分野の基礎的理論の読解と専門学者とのインタビューを通して論文作成経緯を導きだし，日本語教育分野での日本文学のあり方について検討した。

西原（2006b）は，海外における日本文学研究の歴史をたどりながら，影響を与えて来た人物と作品について紹介し，文学という概念がどのようにして導入されたのか，また西洋文学からの影響について整理している。そして，日本文学の読解が日本語教育の到達点とすることを提案している。西原（2006b）は，比較文学の 3 つの立場により作成されている。すなわち，(1) 西洋中心主義的な考えに批判すること，(2) 国粋主義を批判すること，(3) 左翼的な世界観を批判することの 3 点である。これらの比較文学の観点から日本語教育を再考し，日本語教育における文学の学びの過程を提案した。文学を国際的な視野で捉え直すこと，文学を文化と結びつけ学習者自身の解釈によって，より深い異文化理解を得る機会とすること，また文学作品に使用される教養のある日本語を身につけること，である。

キーワード：日本語教育，日本文学，比較文学，日本語学習者，教養のある日本語

Modern and Contemporary Japanese Literature in the Field of Japanese Language Education:

Daisuke Nishihara's "Sekai no naka no kin, gendai nihon bungaku"

Daichi Yanamoto and Fei Xiaodong

How should Japanese literature be incorporated into the field of Japanese language education? Furthermore, how should teachers teach Japanese literature? To answer these questions, this study considers the role Japanese literature should play in the field of Japanese language education, analyzing the composition and structure of Daisuke Nishihara's "Sekai no naka no kin gendai nihon bungaku" (Modern and Contemporary Japanese Literature in the World). Through a reading of basic theories in related fields and interviews with specialists, the details are derived regarding this article's creation, by which the ideal state of Japanese literature in the field of Japanese language education was considered.

While tracing the history of Japanese literature research overseas, Nishihara（2006b） introduces influential figures and works, clarifying how the concept of literature was introduced to Japan and the influence of Western literature as well as proposing the use of Japanese literature comprehension as an assessment point in Japanese language education. Nishihara (2006b) has written about three comparative literature positions: （1） critiquing Western-centric thinking, （2）critiquing ultranationalism, and （3）critiquing a left-wing worldview. From these comparative literature perspectives, Nishihara reconsiders Japanese language education and proposes a process for learning literature therein: reconsidering literature from an international perspective; obtaining opportunities for more deeply understanding other cultures on the basis of connecting literature to culture and the interpretations of students themselves; and acquiring the cultured Japanese used in works of literature.
Key Words: Japanese Language Education, Japanese Literature, Comparative Literature, Japanese Language Learners, Cultured Japanese

１．はじめに

日本語教育の分野において，研究者はどのように日本文学を研究すべきであろうか。また，教師はどのように日本文学を教授したほうがよいであろうか。さらに，学習者はどのように日本文学を学んだほうがいいであろうか。本研究では，これらの問題を扱う。

近年，日本語教育にかかわる様々な研究が盛んに行われている。しかし，その中で日本文学の重要性が低下していることが指摘されている（西原, 2006b)。学術研究だけでなく，日本語教育の現場においても，日本文学を重視すべきである。なぜなら，学習者の日本文学の素養を養うことによって彼らの日本学習がスムーズに行えると考えられるからである。そこで，本研究では，専門科学者の研究成果を分析し，研究者・教授者・学習者という 3 つの立場から日本語教育分野における日本文学のあり方について考察する。具体的には，専門科学者（西原大輔氏）の関連研究をもとに，関連専門領域の基礎概念や基礎知識を紹介し，専門科学者が論文を作成する経緯を分析する。最終的に，日本語教育分野における日本文学のあり方について論じる。

２．専門科学者の論文の紹介

本研究は，西原大輔氏が執筆した「世界の中の近・現代日本文学」を取り上げる。この論文は，縫部義憲監修・水島裕雅編集の『講座・日本語教育学　第 1 巻　文化の理解と言語教育』（スリーエーネットワーク，2006）に収録されている。論文では，日本語教育学の隣接領域としての視点から 3 つの問題が扱われていた。すなわち，(1) 日本文学がいかに海外で研究され，受容されたか，(2) 近・現代日本文学がどのように外国の文学や文化に影響を受けてきたか，(3) 日本国内における望ましい日本文学研究のあり方とは何か，の 3 点である。これらの問題を議論するために，「海外における日本文学研究の歴史」「文学概念の導入と西洋文学の影響」「国文学から日本文学へ」の三章を設けていた。以下，各章の内容をまとめて紹介する。

まず，「海外における日本文学研究の歴史」をまとめている。海外の日本文学研究は，近代になってから始まった。幕末の開国以降，本格的に日本文学が研究を始めたのはイギリスであった。明治初期になってから，イギリス人（William George Aston, 1841~1911; Ernest Mason Satow, 1843~1929; Arthur David Waley, 1889~1935）日本学者は，『日本書記』や『源氏物語』『枕草子』などの主に古典文学に関心を示し，次第に近代日本文学も取り上げるようになり，英語の翻訳により近代日本文学が紹介されていた。このように，イギリス人学者は，初期の日本研究に重要な役割を果たした。また，イギリス人の他にも，フランス人（Paul Claudel, 1868~1955）やポルトガル人（Wenceslau de Moraes, 1854~1929)，アメリカ人（Ernest Francisco Fenollosa, 1853~1908）日本学者も日本文学の研究に大きく貢献した。フランス人は，浮世絵や美術工芸に関心を示し，ジャポニズムの流れを生み出し，アメリカ人は，日本の古美術に深くかかわった。アジアの中では，明治時代に清国外交官が日本に関する書物を残し，日露戦争の前後に，大陸の著名な知識人たちは日本に留学し，近代日本文学に興味を示し始めた。また，1910 年代頃より，朝鮮半島の文学者も近代日本文学に興味を示し，日本文学の影響下に自らの文学作品を創作し始めた。そして第二次世界大戦後，欧米における日本研究の一環として，日本文学は確固たる地位を確立していった。時代の発展に伴い，日本文学の研究は海外で盛んに行われてきた。そして，近年になって，海外における日本文学研究の隆盛が，日本国内の日本文学の研究に影響を与えるようになった。

次に，「文学概念の導入と西洋文学の影響」をまとめている。近代になるまで，日本には

「文学」という概念は存在しなかった。“literature”を「文学」という漢字に翻訳したのは，1850 年代の上海であった。そして，「文学」という言葉が新しい日本語として定着したのは，明治始めであった。ただし，当時の「文学」は今日のような地位と重要性を持つものではなく，一種のサブカルチャーにすぎなかった。例えば，当時の小説は，戯作の伝統を引き継いだものが多く(『西洋道中膝栗毛』や『安愚楽鍋』等)，天下国家や国際情勢に関心が向かっていた若者にとって，一段下がった程度の低いものと見られていた。とはいえ，政治小説(『経国美談』『佳人之奇遇』『雪中梅』等）というジャンルが成立したものの，文学は重視されていなかった。その後，英文学が受容され，文学軽視の情勢に変化が訪れるようになった。帝国大学に英文学科が設置され，非実利的な外国文学の研究が明治のアカデミズムにとって重要な課題となった。明治以降の日本文学は，世界中の様々な国の作品の影響を受けながら形成されてきた。一方，日本国内での日本文学の研究が進むことが海外における日本文学の研究にも影響を与えた。その影響によって，海外で日本文学への関心が高まり，海外における日本文学がさらに注目されるようになった。

最後に,「国文学から日本文学へ」をまとめている。現在の日本には,「日本の中の日本文学」という発想が残存しており，これは「国文学（National Literature)」と呼ばれている。この言葉には愛国主義や日本原理主義の響きを伴っている。「国文学」と区別するために，「世界の中の日本文学」という言葉が用いられており，これは「日本文学（Japanese Literature)」と呼ばれている。「国文学」が閉ざされた小世界であるのに対し,「世界の中の日本文学」という言葉は，より開かれた，自由で国際的な日本文学研究を指向した用語である。「国文学」という学問体系を作り上げてきたのは，芳賀矢一（1867~1927）や藤岡作太郎（1870~1910）等，国文学草創期の日本人学者であった。彼らは，厳密な文献主義，緻密な考証，大日本帝国を支える精神的支柱たる国文学の威厳を重視してきた。第二次世界大戦後，国文学とは対象的に,「日本文学」の研究が盛んに行われるようになった。「国文学」と「日本文学」の相違は，国語学や日本語学とも，並行して考えることができるものである。西原は，日本語教育と関連した日本文学研究は「世界の中の日本文学」であるべきであると述べている。

西原は，論文の最後に日本語教育における日本文学の課題について 2 点言及している。一つは外国人日本語学習者にとって日本文学の読解は困難なものであり，高等教育機関における日本文学の授業においても，翻訳を通して行われている場合が多いことである。これは，果たして日本語教育分野における日本文学のあり方であろうか。もう一つは，近年の日本語学習者が映画や漫画，アニメなどのサブカルチャーに興味を持ち日本語学習の動機となっている一方で，日本文学の重要度が低下していることである。日本文学の重要度の低下が，日本語教育にどのような影響をもたらすのであろうか。

以上のことをふまえ，日本文学は日本語教育分野においてどのように位置づけられているのだろうか。次節では，専門科学者へのインタビューを通して，西原（2006b）の作成経緯を紹介しながらこの問題を論じる。

３．専門科学者の研究内容における読解とその構造

3.1 研究論文の作成経緯

西原（2006b）は，主に 3 つの立場から作成された。すなわち，(1) 西洋中心的な考え方を日本の立場から批判すること，(2) 過剰な日本中心的な考え方（国粋主義）を批判すること，(3) 左翼的な世界観を批判すること，の 3 つの立場である。

（1）開国した直後の日本では，「西洋は東洋より優れている」，「西洋は文明世界だが東洋は未開・半開の遅れた地域だ」，といった偏見が存在していた（西原，2006a）。

西洋中心主義批判の思想とは，「西洋は優れていて，東洋は劣っている」という偏見と対峙するものであり，日本の知識人が西洋から何を学んできたのか，何を残そうとしたのかについて着目し，また西洋から見た日本はどのようなものであったのかについて研究している。西洋だけでなく，日本独自のものをアピールする必要があると主張するのが，「世界の中の近・現代日本文学」を作成する経緯の1つとなった。西洋批判の考え方は，小澤（1999）でも指摘されている。すなわち，西洋を崇拝することで，西洋人学者の方法をそっくりまねてしまうおそれがあるとされている。日本比較文学は，日本に独特の価値を見出さなければならない。

（2）国粋主義批判的の思想とは，近代以前の鎖国政策に見られるように偏狭的で外国から国を閉ざしていた時代の視野の狭い知識人の排他的思想に対する批判するとともに，そのような時代において蘭学者や宣教師，朝鮮通信使といった海外との交流により世界的視野で文学の発展に貢献した知識人の存在は貴重なものであるとするものである。かつて日本は，鎖国・海禁といった政策を取り，海外との関係を制限していた。そのため，視野の狭い知識人が数多くいた。これらのことは，日本文学・日本文化の発展に大きな障害となった。西原は，「世界の中の日本文学・日本文化」という視点を取り入れることの重要性を述べていた。

（3）マルクス主義批判の思想とは，貧富の差や労働者の立場の違いを重視し，革命によって資本家や富裕層から富を収奪し労働者や農民に分け与えるマルクス主義への批判である。マルクス主義は，あくまでも一時的な解決しかならず，結果として国の衰退を引き起こすことがあるものであり，日本の進歩，文明開化を支えたのは日本の発展を願う愛国者の存在があったと考えている。西原は，原理主義的マルクス主義が日本比較文学の第三の敵と述べていた。

これらの比較文学における3つの視点を，日本語教育に置き換えることで，日本語教育分野のあるべき姿の指標となるのではないだろうか。次節では，日本語教育分野における日本文学の位置づけを述べていく。

3.2 日本語教育分野における本研究論文の位置づけ

＜西洋中心主義批判の観点＞

文学研究には，文学理論が存在する。その理論は主に西洋の観点から作られている。しかし，これは日本において当てはまらないことがあり，日本文学というものを独自の文学理論で研究する必要があることが言える。

例を挙げると，アリストテレスが「詩学」において「文学は現実を再現するものだ」と定義している。これは，西洋の文学の考え方において文学は，現実を言葉で再現することだと捉えているという代表的例である。一方，日本文学は「古今和歌集」以来，文学は感情の表現だとされている。文学というものの捉え方に根本的な違いが存在するのである。

言語教育や言語学分野の研究は，その多くが欧米中心の研究であり，それがモデルとなり，日本語などの異なる言語にあてはめようとしている。日本語教育においても，欧米の研究をもとに，検討されている部分が多い。しかし本来言語は，各地域の生活と密接に結びつき，独自の特徴を持って発展し，現在に至っている。それらの特徴の異なった言語の研究が西洋中心として発展していくことについては，注意深く考える必要があるだろう。日本には，独自の文化と独自の言語があり，特に英語との様相は大きく異なっている。よって，日本語あるいは日本語教育として適切な方向性を見出す時，これまで西洋中心的に

積み重ねられてきた研究について，疑問の念を抱き，より普遍的な研究を行っていく必要がある。

＜国粋主義批判の観点＞

文学には「国文学」と「日本文学」という 2 つの領域が存在する。国文学は日本の観点から文学を捉え，日本文学では国際的視野から日本文学を捉えることを目標としている。日本語を扱う研究分野には「国語学」と「日本語教育」が存在する。国語学は，日本人が日本語を話すためのものであり，その理論や用語は日本人を対象としている。一方，日本語教育は，日本人以外を対象としている。指導における理論は，世界の人々に理解される普遍的な説明をする必要がある。

日本人であれば日本語が分かると思い込んでいることが多い。しかし，実際に外国人学生を前にして教壇に立った時，日本語についてわかっていなかった部分に気づかされることがあるはずだ。外から見ることで初めて見えてくることがあるのだ。

文学においても，外国で翻訳された作品を通して,海外で日本文学がどのように捉えられているのが見えてくる。西洋では，日本文学が西洋文学の理論の観点から解説されていることが多い。また，日本の文学作品が，国内以上に海外で脚光を浴びることもある。代表例として厨川白村の作品は，その近代的な世界観が注目を浴び，1900 年代から 1920 年代にかけて中国の多くの知識人たちに読まれ，その研究も多岐にわたる。国文学のみを追求していけば，国際的な視野というものから文学を捉えることはできないであろう。文学作品をもう一度，世界的な視野で見直す。そのような観点で文学を捉える日本文学あるいは比較文学と，国文学が並行して存在するのである。日本語教育において，日本人のように日本語を話さなければいけないという目標を教師が到達点として設定することは不適切である。日本人の価値観まで強要するような教育にならないように注意が必要であろう。

＜マルクス主義批判の観点＞

マルクス主義において，文学は政治の道具であり，革命の道具として利用されてきた。日本では文学を政治の道具として使われたことは非常に少ない。この点においても，西洋の文学とは異なる背景を日本文学は持っている。西洋中心的の文学理論に疑問を呈する根拠となるであろう。

今日の言語教育において，直接的な政治意図が掲げられていなくとも，その意図は少なからず存在している。英語が世界の公用語として使用されていることは，欧米中心主義につながる側面を持っている。また，それぞれの国の言語教育においても，自国の言語を広めることにより，世界での自国の影響力を強めるという意図が見え隠れする。各国には言語や文化の普及のための政府機関が存在している。それらの機関に明確な政治意図はなくとも大きな意味での政治的意図は存在する。その方向性が左翼的に傾かないように注意しておくことが必要である。

４．専門科学者の研究論文から日本語教育分野への示唆

以上をふまえ，本節では，研究者・教授者・学習者という 3 つの立場から日本語教育分野における日本文学の研究過程と学びの過程を考え，当分野における日本文学のあり方を論じる。

まず，研究者が学際的な日本文学を研究することが重要であると考えられる。国文学における，閉ざされた狭い分野での研究だけではなく，世界の中の日本文学という自由で開かれた文学研究が必要となってくる。海外でどのように日本文学が受け入れられているのかを研究し，文学研究を再構築することで，外国語教育の中で，どのような作品を取り入れることがよいかについてより明確になるであろう。

表 1　文学を教材として指導過程の提案

	指導の過程	指導過程における具体的内容
指導前段階	①教材の選定	・ 海外でどのような文学作品が研究されているのか ・ 学習者の習熟度や年齢に適切であるか ・ 文化的背景が描かれているかどうか ・ 教師による文学作品の精読
	②目標と課題の設定	・ 文学を通して学習者がどのようなことを学びとることができるかの予測 ・ 読解の理解を深めるための質問項目の設定
指導段階	③読解	・ 学習者個人の読解による内容理解 ・ 教師による語彙の補足説明
	④読みを深める	・ 場面を取り出し，学習者それぞれの解釈について意見交換を行う ・ 学習者が読み取ることが難しい部分についての教師からの補足
	⑤表現を豊かにする	・ 特有の表現について吟味する ・ 学習者が気に入った表現について発表する ・ 教養のある日本語を身につける
指導後段階	⑥フィードバック	・ 学習者がどのような学びを得られたか ・ 内容は適切であったか ・ 次の課題の設定

次に，教授者が日本語教育における日本文学の位置づけを見直すことが重要であると考えられる。日本文学の授業は，翻訳を通して行われている場合が多い（西原，2006b）。翻訳するためには，それぞれの国の背景や価値観というものが付随してくるであろう。日本の文学が感情の表現であることに着目すれば，「日本文化」と「日本文学」は密接な関係にあることに気づく。近年，専門領域の研究分野に進学しない限り，日本語学習者が学習の過程で文学作品に触れることは極めて少ない。読解教材の多くは，論説文や説明文であり，学習者には要約や適切な内容把握が求められる。一方，文学作品は，読み手の捉え方によって解釈が異なる。この特性を生かし，読解授業に文学作品や小説を取り入れる提案が報告されている。岡本（1998）は，小説が個々の読み手に訴えかけ，読み理解への探求心を駆り立てる魅力ある教材であるとし，日本語学習者の読解授業に一冊の長編小説を取り入れている。また，下條・坂井（2014）は，小説を読解教材として使用することにより，従来の教材で多く使用されている論説文や説明文には使われにくい語彙の補完，非明示的意図の読み取り，感覚的，抽象的な解釈の練習，日本語の独特な語感に触れる機会となるとともに，自律的な読みの学習につながるとしている。これらの研究報告は，説明文や論説文では扱われない，解釈の多様性に着目した読解授業を提案している。黄（2002）では，日本語教育に文学を取り入れる時，言語能力の育成を目的とすることよりも，日本文化教育

の一環として取り入れることに文学教育に意義があるとし，川端康成の「伊豆の踊子」を教材とした教室活動例を報告している。この授業では，作品の主題に即したキーワードと設問が提示され，学習者は，作品から感じ取ったことをそれぞれ説明することで，人間理解としての「読み」を図っている。また，作品上の感動した表現や，日本文化ないし川端独自の表現の美しさを学習者に選定させたところ，学習者が比喩表現や擬人法を使って自然描写をしている部分に関心を持っていることを報告している。日本文化の根底にある情緒的側面を日本文学の読解を通して，学習者自らが考え，感じることで，より深い異文化理解の機会が得られるのではないだろうか。

さらに,本研究では文学の表現の豊さに着目し，日本文学を通して「教養のある日本語」を教えることを提案する。

例えば，以下のような例文が挙げられる。

(a) 彼は日本語がよくできる。

(b) 彼は日本語が上手／流暢だ。

(c) 彼の日本語は立て板に水のようだ。

(a) から (b) への移行は，語彙の増加や習熟度が上がるにつれ学習者が選択可能となってくる。上級学習者になれば，日常会話に支障がないため，さらに高い目標の設定が難しくなる。(c) のような表現は，文学作品でみられる教養のある豊かな表現であり，上級学習者といえども，文学に親しみがない限り使用困難な表現であると考えられる。

上級学習者が次に目指すべく言語能力として「教養のある日本語」という目標を設定することにより，日本語教育で日本文学を扱うことの重要な位置づけとなるのではないかと考える。

最後に，学習者が積極的に日本文学を学ぶ姿勢が重要であると考えられる。近年，日本語学習者の興味の大半がアニメーションなどのサブカルチャーにあるといえる。確かに日本語を学習する動機としては効果的であろう。しかし,学習者が日本語を学んでいく過程で,サブカルチャーに頼ることは必ずしも習得に効果的な影響を及ぼすとは考えられない。

日本語を初期に学び始めた知識人たちは，日本の文学を読むことを一つの目標として掲げ，文学を通して日本という国についての理解を深めて来た背景がある。学習者が，すすんで文学に携われるような環境づくりが必要となってくると考える。

５．終わりに

本研究ではまず，西原（2006b）の作成経緯をもとに，比較文学の観点から日本語教育について再考した。今後，日本語教育が多様に変化していく中で，方向性を修正する一つの指針となるであろう。そして，今回の研究を通して，日本語教育において文学をどのように教授すべきか、また学習者はどのように文学を学ぶべきかについて学習過程を提案した。その内容をまとめると以下の通りである。

① 文学を国際的視野によって再考する。

② 文学の読解により，学習者自身が自ら考え，異文化理解を深める機会とする。

③ 教養のある日本語表現の習得のために，文学を教材とする。

④ 日本語学習者が文学と携われる環境整備を行う。

文学作品を読むということは，学習者が自主的に取り組む課題としては，やや難しい側面を持っている。しかし，教材として教師が適切に提供すれば，学習者の言語能力の向上や，異文化理解を扱う際，有効な手段になるであろう。

今後，さらなる文学研究と教材研究の蓄積が期待される。

主要参考文献

岡本佐智子「上級文章表現授業への試み―リ

ーディング 一冊の長編小説を主教材として―」『日本語と日本語教育』第 26 号, 1998 年, 55-72 頁。
小澤萬記『「比較文学」の 2 冊の教科書について』高知大学学術研究報告, 第 48 巻, 1999 年, 169-175 頁。
黄錦容「針對日語教育中「文學課程」可能性之探究―以川端康成《伊豆的舞娘》為例」『淡江人文社會學刊』, 第 12 期, 2002 年, 75-94 頁。
下條正純・坂井美恵子「日本語教育に小説を用いるということ」『九州地区国立大学教育系・文系研究論文集』九州地区国立大学間の連携に係る企画委員会リポジトリ部会, No.4, 2014 年 3 月。
西原大輔「世界の中の近・現代日本文学」縫部義憲監修・水島裕雅編集『講座・日本語教育学 第 1 巻 文化の理解と言語の教育』スリーエーネットワーク, 2006 年, 55-67 頁。
西原大輔「日本比較文学の思想的背景」『同人別巻 2：越境の比較文化・比較文学』2006 年, 38-43 頁。

著者
柳本 大地 広島大学大学院教育学研究科博士課程後期
費 暁東 広島大学大学院教育学研究科